

高層住宅団地の子どもの遊び環境に関する研究（第2報）

——千里竹見台団地の場合——

新 田 米 子

Studies on Environment for Children's Play in High-rise Housing Projects (Part II)

——A Study on Senri-Takemidai Housing Project——

Yoneko Nitta

緒 言

本研究は、高層住宅団地という特殊な住環境において、子どもの遊びとそれらを取り巻く空間特性との関連について解明し、今後の集合住宅における遊び場計画の基礎資料を得ようとするものである。前報⁽¹⁾の高島平団地（東京都板橋区）における事例研究では、建物の高さに焦点をあて屋外遊びとの関連性を検討したが、今回の調査は、そのほかの空間特性と遊びとの関係を明らかにすることを目的として行った。

調 査 方 法

1. 調査対象団地の概要

調査対象団地は、大阪府の吹田・豊中両市にまたがる千里ニュータウン内の住宅公団千里竹見台団地1・2丁目である。図1は団地の配置を示している。対象とした住棟は、2丁目の高層9棟（11階建て板状3層スキップ片廊下型5棟と11階建て塔状各階ホール型4棟）、中層8棟（4階建て）および1丁目の中層5棟（5階建て）である。この団地の高層住棟の一部には、すなわち6号棟と7号棟の間、7号棟と8号棟の間、9および10号棟の

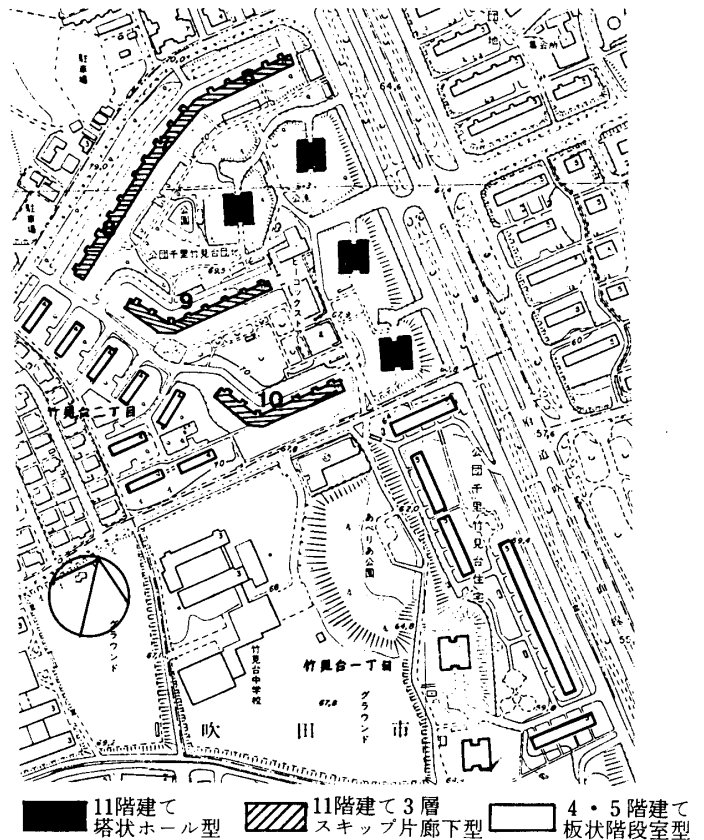


図1 千里竹見台団地配置図

屈折した部分のそれぞれ4・7・10階には幼児向けの遊びコーナーが設けられてある（以下本文中ではこのコーナーを「中間階の遊び場」と称する）。団地内の遊び場としては、2丁目に広い園地が2つあり、そのほか高層住棟入口付近にはそれぞれに小さなプレイスペースが設けられている。また団地付近には通称「あべりあ公園」と呼ばれる児童公園や小学校のグラウンド、竹見公園（団地より北西へ約0.5km離れた場所）、千里南公園（南東へ約0.5km離れた場所）などがあり、児童の遊びには恵まれた環境にあるといえる。

2. アンケート調査の方法

満2歳以上、12歳未満の子どものいる全世帯約670戸を対象とし、質問紙法で主婦に回答を求めた。調査票配布数は高層が351に対し有効票数は298（回収率84.9%）であり、中層が配布数188に対し有効票数は118（回収率62.8%）であった。調査期間は1979年11月23日より同月26日までである。また同年7月下旬に観察およびヒアリング調査を実施した。

結果および考察

以下に述べる結果は高層住棟の子どもについてのデータが主なものであり、とくに高層、中層の区別の明示がない図は高層の結果を表すものである。

1. 子どもの遊びの実態

1) 遊び場所

図2は子どもがふだんどんな場所で遊んでいるかを示したものである。屋外では団地内の大きな園地や住棟前の園地が6割以上の子どもに利用されていることがわかるが、自住戸で遊ぶ子どもも同程度であることは見逃せない。また廊下や中間階の遊び場での遊びは、全体の中で占める割合としては少ないが、幼児の遊び場としては注目してよい空間と考えられる。

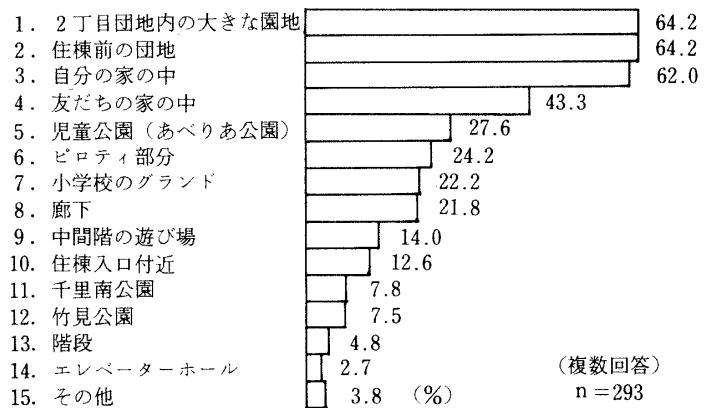


図2 よく遊ぶ場所

2) 団地内園地での遊び回数・時間

図3は週当りの園地での遊び回数を、図4は1日の遊び時間をそれぞれ性別・年齢別に示したものである。これらから、6～8歳児が遊び回数・時間ともに最も多く、園地で遊ぶ子どもの中心的存在になっていることがわかる。また遊び回数を高層と中層とで比較した場合(図5)、中層の方が「ほとんど毎日遊ぶ」という子どもの割合が高層よりも若干多いことがわかる。

次に、園地に出て遊ぶ回数の少ない子ども、すなわち週に3・4回以下の子どもについてはその理由を答えてもらった。結果は図6に示す通りであるが、これによると中層では「勉強などが忙しく遊ぶ時間があまりないから」という理由が43.5%と最も高い割合を占めているが、高層ではこの理由が

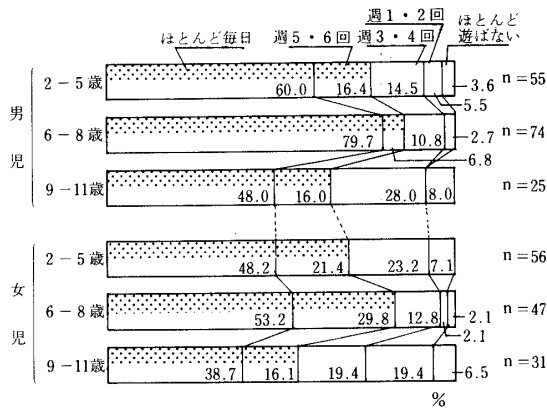


図3 団地内園地での遊び回数

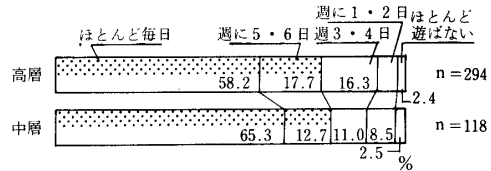


図5 園地での遊び回数—高層と中層の比較

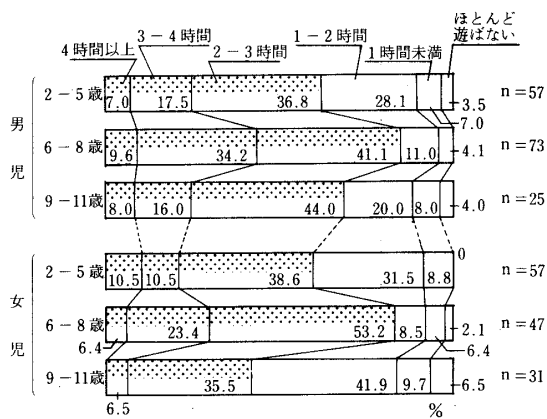


図4 団地内園地での一日の遊び時間（平日）

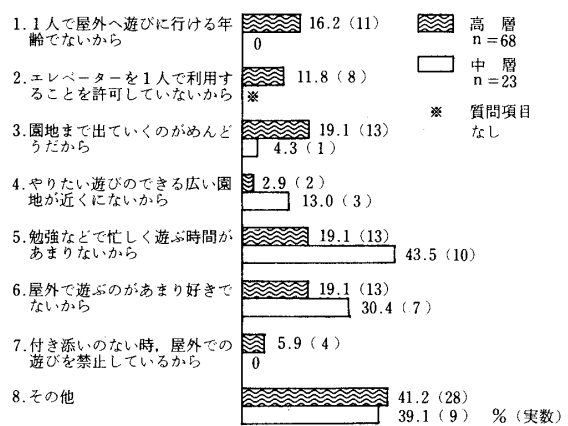


図6 屋外遊びの少ない理由（複数回答）

19.1%を占め、これと同率で「園地まで出ていくのがめんどうだから」という理由があげられている。すなわちこのことは、高層住棟は中層住棟と異なって戸外へ出ることをおっくうにする空間特性を備えていることを意味するものといえよう。

3) 遊び回数の居住階別比較

高層住宅においては、居住者が屋外に出ることを阻害する主要な因子に、空間特性として建物の高さがあげられる。このことは高島平の調査でも明らかにされつつあるが、今回も同様に居住階を1～3階（下層階）、4～6階（中層階）、7～11階（高層階）と3段階に分け比較を試みた。図7はその結果を表すものであるが、小学校高学年（9～11歳）を除いた低年齢層においては、下層階および中層階の子どもの方が高層階の子どもに比べ園地へ出る回数が多くなるという傾向が見い出され、この仮説はより一層明らかにされたといえる。

次に図8は、子どもが屋外へ遊びに出る時に大人がどの程度付き添うかを表したものである。高層

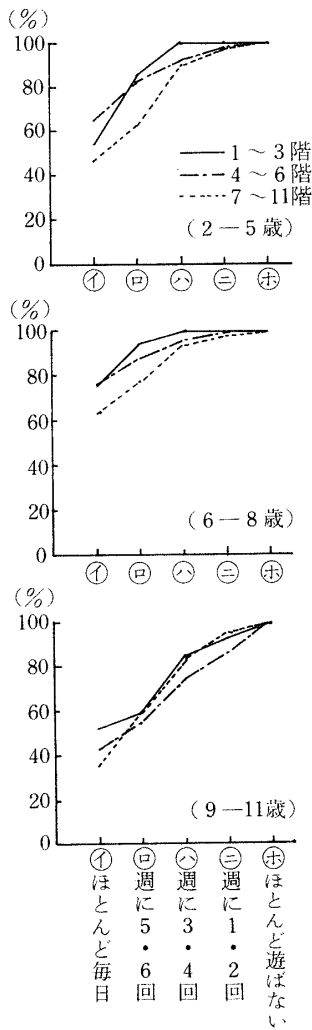


図7 園地での遊び回数
階別比較〈累積比率〉

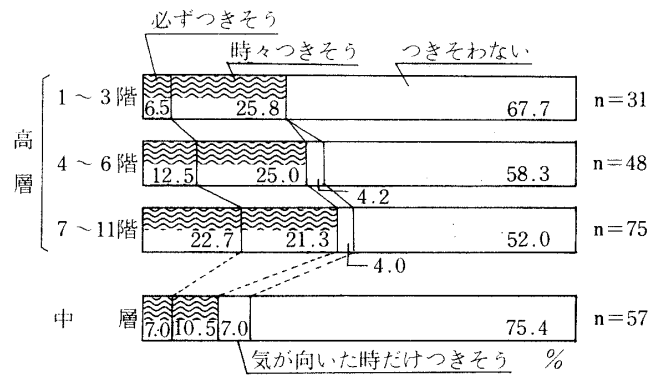


図8 遊びへの大人の付き添い程度 (2-6歳)

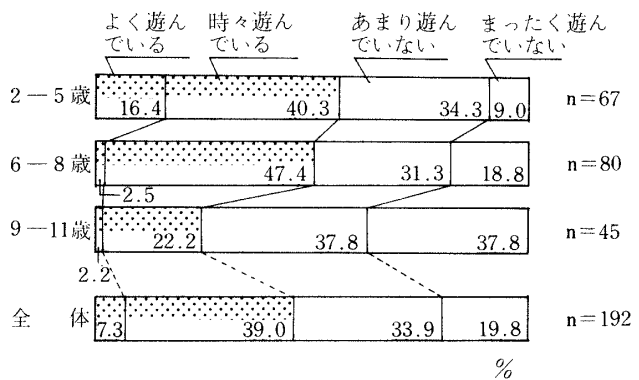


図9 中間階遊び場での遊び程度

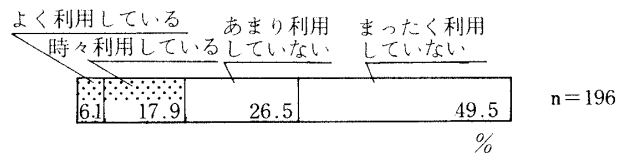


図10 中間階遊び場での主婦の利用程度

は居住階別に、中層は全体でそれぞれ2-6歳の子どもについて比較している。これによると高層では居住階が高くなるほど付き添い率が高くなり、さらに中層よりも高層の方がその割合が高いこともわかる。そして、付き添い理由としては高層の場合、「けが・事故が心配だから」が76.5%、「1人で遊べる年齢でないから」が32.4%と高い回答率を占めているが、これらは低年齢児については当然の理由であろう。しかし「子どもが遊んでいる姿が自住戸からみえず不安だから」(30.9%)や「子どもが1人で自住戸にもどってこれない心配があるから」(23.5%)などは高層住宅居住者故に生ずる不安と思われる。以上のことから、高層住宅の高層階になるほど親は子どもが屋外へ出ることを不安がる傾向があり子どもに付き添い割合も多くなり、子どもの屋外遊び阻害へとつながっているといえよう。

2. 中間階の遊び場の利用実態

はじめにも述べたが、当団地の板状3層スキップ片廊下型住棟の4・7・10階には、固定遊具・ベンチなどが設けられたバルコニー風の小さな遊び場がある。この空間は幼児と幼児に付き添う母親のために計画された場と考えられる。子どもと母親のこのスペースの利用状況については図9・10に示

す。2～5歳の子どもが比較的良好に遊んでいることがわかるが、母親の利用は回答者全体の24.0%（「よく利用している」と「時々利用している」を合わせた割合）とそう多くはない。また母親についてはその利用方法をみると（図11）、「物干し場に利用」が最も多く64.0%、ついで「子どもを遊ばせ見まもっている」が44.0%という結果になっている。さらにこの空間に対する感想としては（図12）、「幼い子どもの遊び場として適当である」と答えた者46.7%、「住戸から近く気軽に利用できる」が29.9%、「少し狭すぎる」が21.3%などとなっている。つまりこの遊び場は、住戸から近いので幼い子どもを遊ばせるには都合がよく、「できれば各階にこのような遊び場があればよい」という意見も少なくないが、少し狭いのが欠点というあたりが母親の評価となっている。この中間階の遊び場に対する感想を求める質問項目の回答欄には取りあげなかったが、遊び場のデザイン的な要素も遊び場の利用に影響してくると思われ、この点については今後の調査で明らかにしてゆきたいと考える。

3. 設計提案についての意見

今回の調査では、現存する高層住宅において欠如していると思われる幼い子どもの遊び場への空間的配慮を加えたものとして、次の2つの遊び場の提案を試みた。

（提案1）「住戸から見まもりながら子どもを遊ばせることができるように住戸前の廊下を広くとり遊びスペースとする（音が住戸に響かないように二重窓にするとか壁を厚くするとかの配慮をする）」

（提案2）「各階のエレベーターホールを少し広くとりベンチや簡単な遊具を置いて子どもも遊べ大人もくつろげるような場とする（防音については提案1と同様に配慮する）」

以上の内容の提案に対し、調査票にはそれらを表すスケッチも例として載せた。

これらに対する主婦の反応は、図13・14に示す通りである。提案1に対しては、「やるべきだ」、「やった方がよい」という賛成意見が18.0%で、その理由としては「住戸に近いので安心できる」が49.0%、「住戸に近いので子どもが遊びやすいと思う」が45.1%などがあげられている。これに対し、「そこまでしなくてよい」63.7%、「やるべきでない」11.2%と反対意見も多く、その理由に「廊下は遊ぶ場所

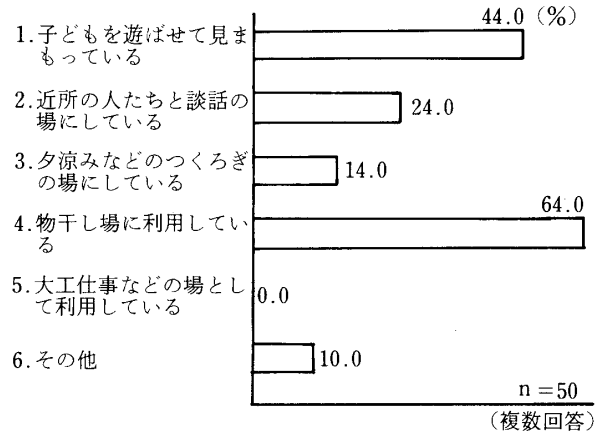


図11 中間階遊び場の利用方法

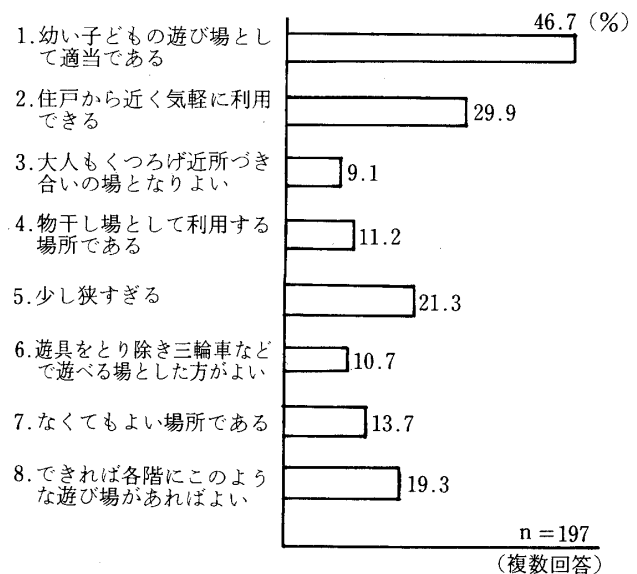


図12 中間階遊び場に対する感想

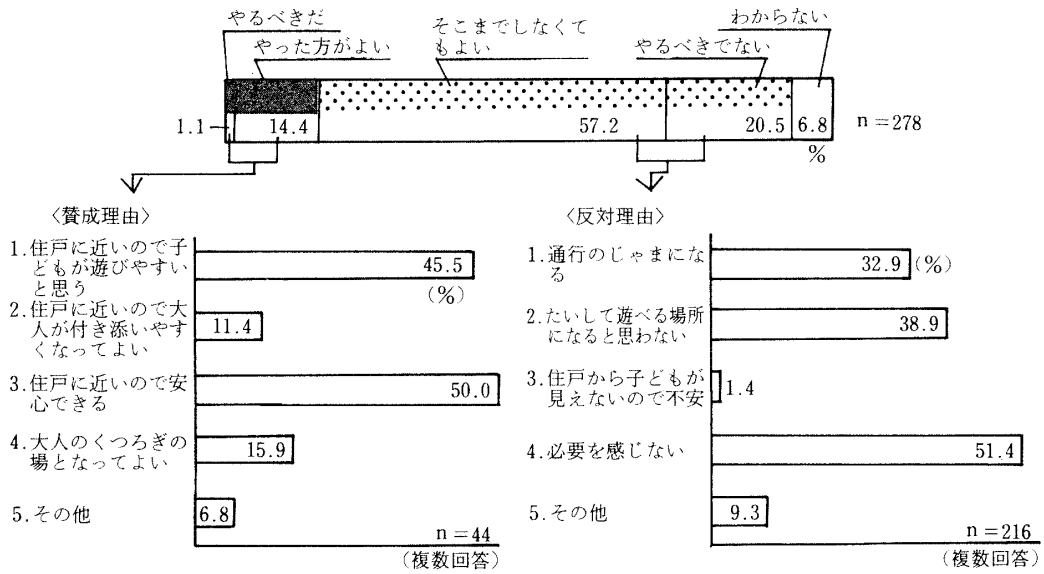


図13 <提案1> についての意見

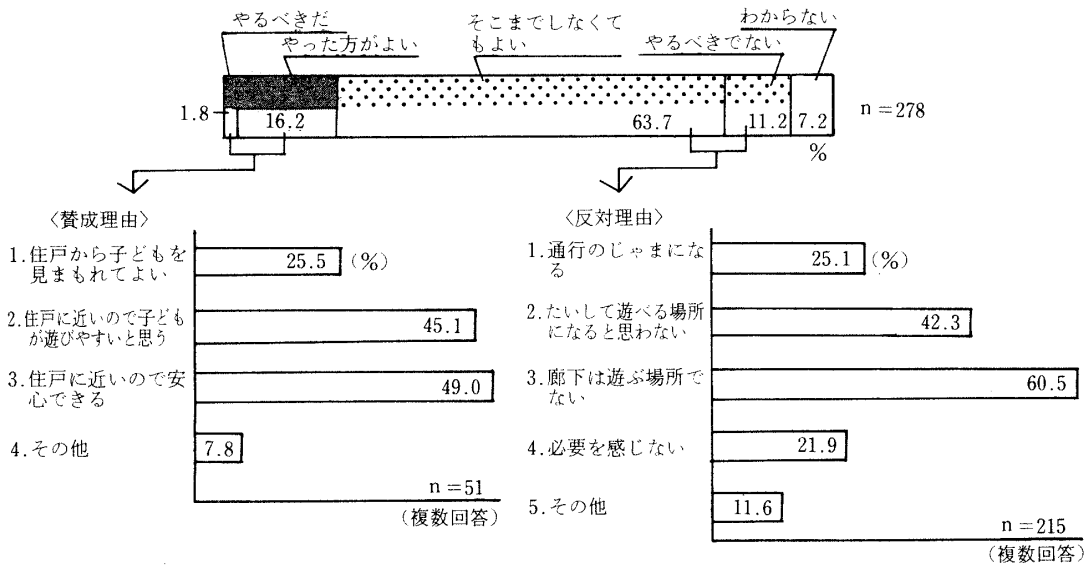


図14 <提案2> についての意見

でない」という回答をあげた者が60.5%と多い。提案2についてみても賛成者は少なく15.5%にとどまっている。賛成理由としては提案1と同様に住戸に近いことに好感をもたれていることがわかる。また反対の理由としては「必要を感じない」が51.4%となっている。

以上の結果は、居住者が現状の集合住宅から、提案するような空間を思い浮かべることに無理があったこと、また廊下で子どもが遊ぶようになると、たとえ防音上の配慮はしてもどの程度音の問題を解消できるのか不安が残ること、そして提案そのものは理想的ではあっても実現化の見込みは薄いというあきらめなどが反映したものではないかと考えられる。しかしながら、これらの提案について子ど

もの年齢別に賛否を比較してみると（図15），2～5歳層は全体より賛成の率が高いことがわかり，幼少の子どもにとってのそれらの必要性はある程度認められたといえよう。

要 約

以上千里竹見台団地における事例調査の結果をまとめると次のようになる。

1. 前回の高島平団地の場合と同様居住階が子どもの遊びに対する付き添い，園地での遊び回数に影響を及ぼし，高層階居住の子どもほど屋外での遊びが阻害される傾向が認められた。

2. 4・7・10階に設けられた中間階の遊び場は，2～5歳の5割強の子どもに「時々」あるいは「よく」利用されているが，主婦の利用は1/4程度にとどまっている。またこの空間に対する感想としては，「幼い子どもの遊び場として適当である」と答えた者が半数近くを占め，「住戸から近く気軽に利用できる」が約3割とこの空間の存在の意義を認める回答を多くみられたが，「少し狭い」という不満も約2割あった。

3. 住戸近くの廊下やエレベーターホールで幼児が遊べるように設計上の配慮をすることに対して，居住者の反応は，積極的な賛成を示す者が2つの提案ともに2割以下と少なく，住棟内での身近な遊び場については今後さらに検討の必要があろう。

本研究は，昭和54～55年トヨタ財団研究助成による総合研究「高層住宅環境にたいする人間反応に関する研究」（奈良女子大学家政学部教授湯川利和，国立精神衛生研究所精神身体病理部長高橋宏ほかによる）の一部を担当したものである。

調査にあたっては，奈良女子大学住居学科瀬渡章子教務補佐，RIA建築総合研究所加納由美子氏に多大なご協力をいただいた，記して感謝の意を表する。

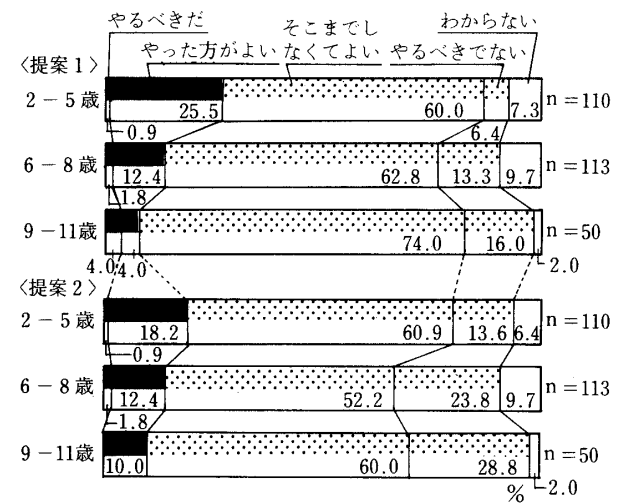


図15 提案1・2についての意見一年齢別

注

(1) 新田米子：家政学研究（奈良）Vol.27 No.1（1980），P.35～42